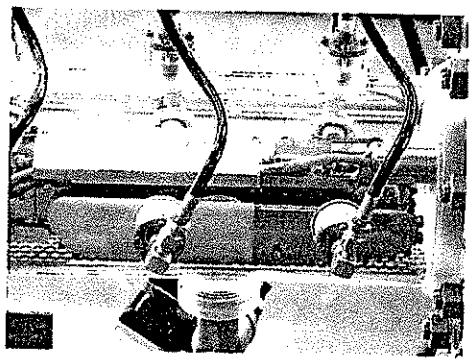


# 燃料の取り出し再延期

## 福島第一3号機 がれき撤去遅れ



原子炉格納容器に接続する筒に収められた調査ロボット「サンリ」横浜市の東芝京浜事業所

国と東京電力は22日、福島第一原発3号機の使用済み燃料プールに残る566体の燃料の取り出しを、再び延期すると明らかにした。建屋上部の放射線量が下がらず、がれき撤去などの準備作業が遅れていたため、目標だった2018年1月の開始を断念する。

燃料の取り出しは当初、15年度の予定だった。だが、高い放射線量に阻まれ、延期。作業フロアの表面を削ったり、鉄板を敷いたりして放射線量を下げる作業を進めた。しかし、予想以上に汚染が広がっていたため作業に時間がかかり、再度、延期を決めた。経産省によると、年明けに改めて取り出しの目標時期を決める方針。1、2号機での取り出しは現時点で20年度以降としている。

また、2号機ではこの日、原子炉格納容器内に溶け落ちた燃料の取り出しに向け、燃料の位置や広がりを探る調査ロボット「サンリ」の投入口を開ける作業が始まった。しかし、内部から放射性物質が漏れる懸念が生じ、作業を中断した。投入口を開ける機械と格納容器の間に隙間があり、密封が保たれていなかったという。

「サンリ」はこの日、横浜市の工場から発送され、調査は来年初めに始まる予定だったが、遅れる可能性が出てきた。東電の担当者「密封と穴開けを年内にやり直し、遅くとも2月末までには投入したい」と話した。(杉本崇、富田洗平)